



“目と足を通して” 理解した 日本の文化

韓 東洙 (非文字資料研究センター外国人研究員・研究協力者
漢陽大学校建築学部教授)

今年の3月末から非文字資料研究センターの客員研究員として1年間横浜に滞在することになった筆者は、短期間の旅行ではなく、初めて日本で生活しながら日本の文化を理解する機会を得られるようになった。筆者は2011年に韓国のソウルと水原で非文字資料を利用した展示会ⁱを準備しており、そのためにも滞在中にしておかなければならない事として二つの目標をたてていた。

一つは、私の住んでいる横浜と、ここから遠くない東京、この二つの都市における空間の構造とその中で生活している日本人の暮らしを理解するということであった。もう一つは、博物館・美術館・記念館などで開催される様々な特別展示会、あるいは常設展示会を通じて非文字資料の活用方法を直接経験して理解するということであった。

前者に関しては、筆者が10余年にわたる中国での留学生活を通して、台北と北京の都市を徹底的に経験し、それにより台湾と中国の文化はもちろん、中国人の暮らしにも深く入り込む事ができたからでもある。このような経験から、留学を計画している教え子達にも、自分が留学する街については、必ず徹底的に理解するようにアドバイスしている。

日本においても筆者のこのような考え方は変わらず、同じ方法を通して横浜や東京も理解しようとしている。特に、今滞在中の横浜国際学生会館や神奈川大学の周辺という横浜の都市については、ほとんど目と足を通して確認すべきだと思う。実際に歩いてみた場所は地図に表し、同じ地域に行く場合にも出来る限り違う道を選択して歩くことで、経験の幅を広げようとしたのである(図1)。

しかし、東京は横浜と違い、とても大きな都市であり、

いつも横浜に帰らなければならないという負担があるため、あらかじめ主要地点を選択し、その周辺は歩いて回り、主要地点への移動は電車を利用する方法で、何回も主要地点を往来したのである。ただし、電車を利用する時に、交通費を気にせず迂回することになったとしても、出来るだけ重ならない路線で行こうとした(図2)。そうするうちに6ヶ月が過ぎた今では、ある程度二つの都市の主要な空間に対しては基本的には理解しているし、表面的でありながらも、その中に含まれている日本人たちの暮らしを観察することができた。その印象を一言で要約するには難しいが、持続する堂々たる大都市、細胞の増殖のような空間の拡張、という表面的なイメージを持っている。そして、偶然見るようになった『空から日本を見てみよう』というテレビ番組から、自分の手で作って来た都市への彼らの自負心が感じ取れた。それだけではなく、現在建設中である東京のスカイツリーを通しては、自然への挑戦に対し、再挑戦する不屈の意志も垣間見ることができた。

そして、二番目の目標に関しては、展示会に関する情報をまず広範囲に収集し、ひとまず筆者の専攻と来年の展示会に直接関連がある建築および都市の展示、もしくは



図1 横浜の地図上に表示した筆者の踏査した道(赤線)。横浜の場合は東京と違い、大部分の道は歩いて回った。

i ソウルでの展示会は、主題が〈1930年代京城の街の風景：鍾路と本町〉で、水原での展示会は、主題が〈世界文化遺産華城と建築図面〉である。
ii 今までみた展示会は約80箇所余りとなる。つまり、週に少なくとも3-4箇所は行ったことになる。

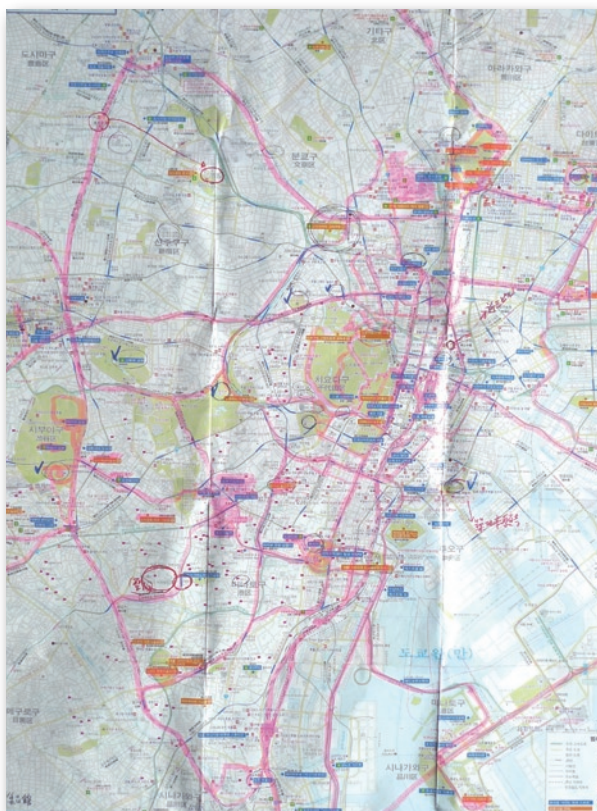


図2 東京の地図上に表示した筆者の踏査した道（赤線）。

は1930年代の近代期に関わる展示を優先的に選択して観覧した。また、週末には時間が許す限り東京と横浜はもちろん、周辺の地域に散在している様々な展示空間も見に行ったのである。ⁱⁱ たまたま今年は展覧会が多かったのかも知れないが、建築および都市に関する立派な展示会を多数見られたことも幸運だったと思う（図3）。その中で最も印象の強い展示は、東京国立近代美術館で開かれた建築家7組による展覧会「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」であった。年齢を越えて現代建築の座標に対して悩む日本の建築家らの姿から、日本建築の現在を発見したと思っている。また、近代期に関する展示会も非常に多く開かれ、最も最近見たものは横浜都市発展記念館で開かれた『モダン横浜』という展示会だったが、それほど大きくない小規模の展示だったのにも関わらず、主題を表わす優れた展示の技法から多くを学ぶことができたので、来年の展示会にも役に立つに違いない。そして、一つ羨ましかったのは、どのような主題の展示会でも、多様な展示物が取りそろえてあるという点であった。それは恐らく資料の整理と保存、絶え間ない再生産の結果と考えられる。例えば、都市景観の変遷を展示する場合、主には100年前と50年前を比較する展示会でも、それにとどまらず、30年



図3 2010年10月8日以後の2週間内で、見に行った展示会のパンフレット。

前と現在の姿まで比較しながら、持続的に現在の姿を整理していることから、それ自体が将来に開かれる次の展示会につながると感じた。さらに、展示物の充実もさることながら、その内容を深く理解できるように展示空間を造る技術も非常に高いと思われる。もちろん、日本と韓国の展示会を直接比較するのは難しいが、基本的に韓国でも建築や都市に関する展示の機会を増やし、展示物の信憑性も高められればと期待している。

もう、日本滞在期間はそれほど長く残っていない。日本に来てから今までは、“目と足を通して”日本の文化を経験することを目指してきた。それは筆者の言語能力が足りないことにも起因する。日本語の勉強には相当な努力を傾けているが、自分の語学センスが足りないせいか、今も相変わらず十分なコミュニケーションはできない。今後また、日本に来る機会があるならば、その時は言語を通じて人に会い、文字を通じて文章を読み、日本の文化を理解したいと思う。最後に筆者が日本の文化に最も近く近付けるように、このような大切な機会を与えてくれた神奈川大学の非文字資料研究センターの方々にお礼を申し上げたい。

（翻訳：徐東千、非文字資料研究センター研究協力者）